



同志社人物誌 (46)

中 村 遙

—大阪水上隣保館と共に—

山 崎 亨

賀川豊彦先生、中島重先生、などの指導した「社会的基督教」の一群に加わって彼はキリスト教的愛の社会的実践の熱情を燃やした。

大阪水上隣保館、これこそ中村遙が、一生を懸けた仕事であった。これは昭和六年、すなわち彼が同志社の神学科を卒業した翌年から開始された。その場所は大阪市港区の幸運橋を安治川寄りに入ったところ、大きな民家を借りて、最初は「水上友愛協会」の表札が掲げられ、舩（はしけ）、団平船の上で生活する人々の子供達四人を預かった。

その頃、大阪港には、約五万人の水上生活者がいたが、学齢児童は約二〇〇〇人を数えたにもかかわらず、その四割六分が不就学児童であった（武邦保調）。両親の目のとどかぬ場所遊び廻っているうちに、過って海に落ち、幼い生命が消えた事件を知って、中村遙はハーバー・シード宣教師と協力し、宣教師帰来後は独力で水上隣保館を開いて月曜から土曜まで子供を預かり、日曜には親の許に帰した。

四人の子供を預かることから始めた水上隣保館も、間もなく三十名を越え、借家も狭隘

序

多くの実業家、教育家、宗教家を同志社に世に送ったが、社会事業の分野においても、傑出した人物を輩出している。留岡幸助、山室軍平、八浜徳次郎の諸氏は、恵まれることの少ない人々に、温い手をさし延べた。中村遙もその一人であって、児童福祉の面で、理

論家であるよりも猛しい実践家であった。

「努力は人間を創る」とは、中村遙がしばしば自著の書と共に、贈った句であるが、これは彼の生涯を象徴する言葉ともなった。

出発点

彼の社会福祉に献げた生涯は、同志社大学で学んだものである。

となったので、天保町の三階建の日本家屋に移った。当時を知る中村敏夫氏（現水上隣保館常任理事）の話によれば、その家は港の片隅、漁舟がおこしめられているような岸壁の上で、舟の油で汚れていて、悪臭が鼻をつくほどの場所であった。其処を神の国とする意気込みで、中村遙夫妻は働いたが、多くの子供たちの寝具には南京虫が集まり、毎朝その害虫退治の戦いで夜が明けたと言う。

子供たちの寝食の世話を一手に引受けて働いたのが八重子夫人であった。親たちが隣保館に渡した月謝は月五円で、しかもそれすらも払えない親たちも少なかった。子供たちの母親代りとして八重子夫人は、多くの子たちを別け隔てなく、ひなを翼の下に集めた母鳥のように、必死になって働いた。主食は米



と麦の半々、副食は唯一つだけの漬物、味噌汁が付けば上等であった。当時は厚生省や地方自治体からの援助もなく、極く限られた篤志家に訴えて後援をお願いしていた。翌日の主食も底をついたという窮乏の中を、二人は食卓に並ぶ三十人の子供たちと、感謝の祈りを唱和しながら涙していた。

送り込まれた子供の中に盗癖のある子供がいた。どんなにさとしても矯正されない。他の子供への悪影響を考えて、館長の遙は親許に送り返そうと言いだした。そのとき八重子夫人は反対して、涙ながらに「こんな子供を矯正できないなら、私はこの仕事を止めます」と頑張って一步も譲らなかったそうである。

危機の時代

中村遙夫妻は苦闘に苦闘を続けたが、その中でも大きな危機が二度襲ってきた。

その一つは昭和九年九月一日の神戸台風のととき、大阪築港の天保町にたつ三階建の大阪水上隣保館を台風は直撃した。二階まで海水が浸水してきたとき、中村館長は何うしているかと職員の人々がズブぬれになり乍ら三階に

昇って見ると、ギシギシ揺れる暗い部屋の真中に、彼は正座して祈っていた。彼は沈みゆく船の船長の心境であったであろう。

嵐の最中に隣保館の子供たちは、日常の如くに登校してしまつたので、水がいく分引いた頃、館長や八重子夫人と職員たちは、いち早く子供を尋ねて膝までつかる水の中を歩いた。幸にもあちらの家かげに三人、こちらの電信柱に二人と見出され、「その時は私達は子供をだきしめて、声も出ませんでした」と公庄秋子は語ってくれた。家屋は壁も落ちこみ被害甚大であったが、幸に子供たちは、一人が足に軽い切り傷を負っただけで笑顔で集まることができた。

第二の危機は戦災を受けたときであった。

水害後、幸にも水上隣保館は再建されたが、昭和二〇年六月一日の大阪の空襲には、折角多くの人の援助を受けて出来上った建物も灰燼に帰した。子供達は早くも親たちを探して帰って行ったが、それと代わるように戦災孤児、混血児も加えられて、中村遙は一層忙しくなった。

大阪駅の北に当る中津にバラックを建て、ちまたにさ迷う子供達が集められて隣保館は

ふくれあがった。ここに根拠地を得ることができたのは、当時市立大学教授であった黒田了一氏のご厚意に依るものであった。

終戦直後の窮乏時代に中村遙は子供達のために東奔西走したが、世間の人々は毎日の糧を求めて血眼になっていた状況で、隣保館は援助を訴える対象を見失っていた。収容された子供たちは、夜のねぐらを与えられたのを感謝しながらも、昼間は靴磨きに、街頭に出てゆく者もいた。

遙は暫時の間、大阪府会の調査室に職を与えられて、一時しのぎをしたことがある。この頃の調査室の同僚の者に遙は将来の夢を語ったことがある。それは大阪の街の中ではなく、近隣に子供たちが迷惑をかける心配や気兼ねをする必要のない山に土地を買い、今でも百人以上いる子供たちを自由に生活させたのだ、と。それは水上隣保館の再出発のプランであり、その資金の一部としては、中の島の一角に所有している土地を売って、それに当てる計画が練られていた。

年表(遙——水上より山上への歩み——の巻末)によれば、昭和二〇年、中津に仮住いをして間もなく、同じ年の暮に、三島郡島本

町東大寺に移転し、翌年には既に地域のために、「山崎保育園」(一三〇名定員)を開設している。他の面では大阪府社会福祉協議会の評議員や理事となり、また同協議会の児童収容部会長ともなっており、社会福祉の分野において指導者の一人として一般に認められていたことを示している。

昭和二十六年、理想実現の第一歩として、現在地、天王山麓に土地を入手した。雑木林を開拓し、道をつけ、軍需工場の不用建築材を買いとり、その中の使用に耐えるもの二、三棟を手に入れて、丘の上に隣保館は建てられた。このために大阪府や市の後援、一般有志の寄付、賀川豊彦氏の後援などがあったが、また中村遙夫妻の熱い折りりと若き協力者たちの並々ならぬ努力が実現させた。

現 状

毎年、同志社大学、明治学院大学其他の大学の学生が、夏期休暇を利用してのワークキャンプが隣保館で催され、道路の整備をしてきたが、子供たちを収容している建築物も次第に改良されてきた。

養護施設(定員一九五名)、昭和四四年開

設された乳児院(定員二六名)、山崎保育園(一三〇名)、藤の里保育園(二二〇名)、山崎幼稚園(六一五名)、キリスト教保育専門学院(一部二〇〇名、二部一五〇名)が建設された。

中村遙は多忙の中に時間を割いて同志社大学、関西学院、神戸女学院、天理大学などに嘱託講師として教壇に立ち、また「児童福祉の理論と実際」以下八冊以上の著書を刊行した。

昭和五一年六月、健康を害し、検診のため高槻の大阪医科大学付属病院に入院、夫人の手篤い看護、医師の完全な治療も空しく、五年一月二六日、過労のため天に召された。「毎朝五時前に起床、夜は十時すぎから一日の締め括り」をしてきた八重子夫人は、其後もますます健在。大阪水上隣保館館長として、理事長として、働いておられる。隣保館は来年五十周年を迎える。

(大学名誉教授 キリスト教保育専門学院長)

(注、前ページの写真は、中村遙が昭和五〇年五月、同志社大学から名誉神学博士の学位を贈られたときの記念のもの)